

Free ANKO Vol.1 | 実施記録

開催日程：2026年8月29日(土)
場所：神奈川県横須賀市立旧田浦小学校 教室1-1 | 時間：11:00-16:00（実際の所要時間は11:00-15:00頃まで）
参加人数：33名(事前予約なし、当日参加のみ) | 収集した欲望メモ：30枚 | 提供した自家製あんこ：30食 | 天候：雨

【Free ANKO Vol.1 | 実施記録 実施の様子】

「Free ANKO Vol.1」は、横須賀市立旧田浦小学校の教室で開催された。当日は終日雨天だった。オープンと同時に1名の参加者が来場し、その後12時頃までは3名程度の参加が続いた。12時頃から14時にかけては、未就学児や小学生を含む親子連れが多く訪れた。後半には、アーティスト、コミュニティ運営者、芸術関係者などの参加が増えた。参加者の年齢層は、未就学児から70代まで幅広くあった。会場となった教室は1階にあり、玄関から比較的近い場所に位置していた。教室の扉は常時開けておき、入口付近の壁には開催案内のチラシや、asamicroの紹介を掲示した。そのため、教室の入口で参加を躊躇するような様子はほとんどと見られなかった。参加者が来場すると、まず空いている席へ案内し、挨拶とともに企画の趣旨を説明した。その後、欲望メモとペンの場所を伝え、記入を依頼した。また、記入後は席の移動や、あんこを食べる場所を自由に選べることを伝えた。基本的な流れは、

来場 → 着席 → 挨拶・企画説明 → 欲望メモの記入 → asamicroへの手渡し → 自家製あんこの受け取り → 自由な場所で食べる

というものであった。参加者の行動には幅があり、着席するとすぐに欲望メモを書き始める人もいれば、しばらく教室内を歩いた後に席を移動し、時間をかけて記入する人もいた。欲望メモと自家製あんこを交換する際にも、対話の時間を長く取る人、短いやり取りで交換を終える人、あんこを受け取った後に席へ戻り、屋台と一定の距離を保ちながら会話を続ける人など、さまざまな過ごし方が見られた。参加者の滞在時間は約15分から90分まで幅があった。



Vol.1の期間中に集められた「欲望のメモ」の中から一部を紹介したものです。

- ・次の大会で14秒にいきたい
- ・24時間を自分の為だけに使いたい!! 介護しているうちに介護される側になったらやだヨ 自由にどこでも行きたいし何でもやりたいヨ
- ・見た目年齢10才若返り 体中のガン細胞なくね
- ・おもちゃがほしいですたくさん
- ・自分の外側にあるこえを 静かに清らかに受けとりたい 自分の思考を介さずに



【観察記録】

1 | 空間のつくりと身体の動き

会場では、学校に残されていた机と椅子を用いて4つの島をつくった。また、教室後方にはレッドカーペットを敷き、茶室のような雰囲気をつくるとともに、靴を脱いで地べたに座れる場所を設けた。この地べたに座れる場所が、今回の空間において重要な役割を果たした。当初の想定以上に子ども連れの参加者が多く、子どもたちは床に寝転がったり、地べたを自由に動いたりして過ごしていた。その動きによって教室全体の緊張感が和らぎ、大人もまた、席に固定されることなく教室内を移動しやすい状態が生まれていた。また、壁には、Free ANKOの出発点となった横須賀の風習「海におはぎを投げる」ことや、asamicroと祖母についての紹介、過去作品の写真を掲示した。これらの情報が、参加者が空間に滞在するためのきっかけとなっていた。特に一人で来場した参加者にとって、掲示物を見ながら教室内に留まるための導線の一つになっていたと考えられる。さらに、教室内では常時音楽を流し、iPadを使った音遊びや、ざると小豆を使った展示的な要素なども設けた。これらによって、空間が完全な無音状態になることを避け、教室全体にカジュアルな雰囲気が生まれていた。

2 | あんこを食べることと対話

自家製あんこを食べることに対して、強い抵抗を示す参加者は見られず、多くの参加者が自然にあんこを口にした。椅子に座り、小さなカップとスプーンであんこを食べる際には、少し照れたような様子を見せながらも、比較的ゆっくりとしたテンポで会話をする姿が多く見られた。asamicroと参加者との対話では、自家製あんこについて、会場となった場所について、なぜ「欲望」が作品に関係するのか、また参加者自身の近況など、複数の話題へ自然に展開していった。企画の説明やあんこ、場所、欲望といった、会話の導入となる要素があらかじめ空間の中に複数存在していたため、対話が途切れる場面は少なかった。

【振り返り】

1 | 参加者との出会い

まず、想像以上に多くの参加者が集まったことが印象に残った。旧田浦小学校へのアクセスの難しさ、地域住民との接点の少なさ、そして当日の悪天候などから、実施前には10名程度の参加があれば十分だと考えていた。しかし、最終的には30名の参加者と、欲望と自家製あんこの交換を行うことができた。実施前の段階では、「なぜ欲望を書くのか」という作品の趣旨を十分に伝えなければ、「長生きしたい」「お金持ちになりたい」といった抽象的、あるいは表面的な欲望が集まりやすいのではないかという指摘を受けていた。そのため当日は、欲望についての企画趣旨と、私自身が「欲望」をどのように捉えているのかを最初に説明した上で、欲望メモへの記入を依頼した。この一連の説明を、実施中に繰り返すことを、自分自身に課した一つの「振付」として捉えた。結果として集まった欲望メモには、それぞれの参加者が現在置かれている状況や、日々の暮らしを感じさせる、具体的に等身大の欲望が多く見られた。

2 | 欲望を差し出すという行為

今回、特に印象に残ったのは、欲望メモと自家製あんこを交換する瞬間だった。ある参加者は、欲望を書いたメモを私に手渡した際、「なんだか涙が出ちゃうわね」と涙を流した。また、参加後には、「参加してみないとわからない。欲望を体の外に発信して、甘さになって体に戻ってくる体験はすごく面白い。文章で見ているのとは違う」という感想をいただいた。この言葉から、欲望を「書く」「差し出す」「受け取る」「食べる」という一連の行為そのものが、作品を身体的に体験するための重要な要素になっていることを改めて実感した。特に、欲望を一度身体の外へ出し、それが「あんこ」という具体的な物質に変わって自分の身体へ戻ってくるという構造は、文章だけでは伝わりにくく、実際に参加することで初めて体感される部分なのだと感じた。

3 | 今後の課題

一方で、パフォーマンスとしては、まだ改善できる部分が多く残っている。一つは、asamicro自身の立ち振る舞いや、企画説明の際の言葉の選び方に不安定さがあったこと。参加者と同じ説明を繰り返す中でも、言葉の精度や身体のあり方をさらに整えていく必要がある。また、屋台を含めた仕掛けや小物についても、作品全体の世界観を支えるブランディングや準備が十分ではなかった。今後は、あんこを提供する場そのものが作品の一部として立ち上がるよう、細部まで検討していきたい。さらに、欲望メモを受け取る際に、asamicroと参加者が同じメモと一緒に見つめる時間をつくることや、場所によって交換方法や手順を変えることによって、参加者の身体の動きや空間の導線がどのように変化するかを試してみたい。今回の実施を通して、Free ANKO は一定の手順を繰り返すだけの作品ではなく、場所、参加者、そして交換の方法によって、身体の動きや関係性そのものが変化する作品であることが見てきた。

今後は、今回得られた経験をもとに、作品としての振付性と、場所に応じて変化する柔軟性の両方をさらに探していきたい。